

宗教空間の成立・消滅・継承にみるシンガポール都市 200 年史
～多文化共生を実現する都市を目指して～

東京大学大学院工学系研究科建築学専攻博士後期課程 高原柚（林憲吾研究室）

画像出典：Google Earth Pro

研究の概要

グローバル化が進んだ現代社会では、習慣や思想の異なる人々が隣り合って生きる状態が普遍化している。その際には個々の嗜好が相互に尊重されるべきであり、生活の入れものとしての都市建築空間が多様性の包摂を後押しすることが重要だ。筆者は、異なる文化の衝突が先鋭化する空間の例として、世俗社会の宗教空間に着目する。そこでは「聖と世俗の衝突」「異なる宗教同士の衝突」「同宗教内の異なる人種の信者同士の衝突」が起こっており、これらを調停する社会的背景に多文化共生を実現する都市を考えるヒントがあると考えられている。こうしたテーマに取り組むにあたって、英領植民地期から独立した現在に至るまで、東南アジアの経済的中心として多様な人種・宗教集団を惹きつけ、狭い土地に多文化が共存する都市を形成してきたシンガポールを取り上げる。シンガポールの多文化主義は独立後の国策として語られることが多いが、その背景には植民地期の多元的社会 plural society の伝統・習慣がある。本研究は英国東インド会社がシンガポールを自由港にした 1819 年から現在までの約 200 年を対象に、宗教空間の都市建築的特性とその背景—なぜそこに立地するのか、いかなる空間を成立させているか—を考察する。なお、シンガポール政府はルーツや文化を共有する集団の呼称として民族 ethnicity ではなく人種 race を用いるため、本報告もそれに倣う。

植民地期の宗教空間（1819～1950 年代後半）（写真は全て筆者撮影）

(1) 異なる宗教の隣接（図は全て上が北。特記のない画像は、Google Earth Pro を元に筆者が作成）

植民地の都市計画では、文化的差異によるトラブル（病原菌の蔓延を含む）を避けるために人種毎に居住地が分けられることが多かった。シンガポールを開港したラッフルズの指示で作成されたシンガポール川沿岸エリアの都市計画 (Jackson Plan, 1822) はその代表例だ。しかし、シンガポールの植民地期の地図を見ると、開港直後の 19 世紀前半から異なる人種・宗教が隣接・近接している地域が見られる。20 世紀になると都市開発による集団移住による居住人種の変化も見られる。都市は計画通りには成立せず、異文化は日常的に邂逅していたと考えられる。



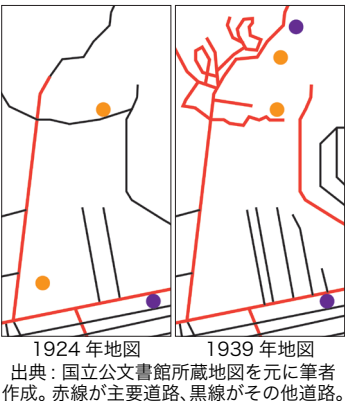
チャイナタウンの Telok Ayer 通りには、北から順にタミル人ムスリムの神殿、福建人の道教寺院、タミル人ムスリムのモスクが並ぶ。かつてこの通りは海に面しており、1820 年代に初期移民の玄関口として発展した。宗教空間は新天地で生活始める縁。宗教が異なっても望ましい立地は同じだったのだろう。



チャイナタウンで隣接するタミル人のモスクとヒンドゥー寺院。これらの土地は 1820 年代後半に東インド会社から売却されていることから、ラッフルズの都市計画は遵守されていなかったと考えられる。またヒンドゥー寺院もモスクと共にメッカの方角に傾いており、空間的影響を受けたと考えられる。



やや内陸の台地の上にシナゴグ、ヘリに華人向けカトリック教会とヒンドゥー寺院が近接している。土地は 19 世紀後半から 20 世紀初頭にかけて、いずれも地主から直接購入しており、都市計画ではなく経済活動の結果として 3 つの異なった宗教空間が近接したと考えられる。



植民地期の宗教空間の分布には、イスラム教徒であるマレー人が住む海岸近くにモスク（紫）、内陸に中国寺院（橙）が多い傾向がある。左図では南側に海岸があるが、1939 年地図ではモスクが内陸に進出している。これは海岸で暮らしていたマレー人が空港建設により集団移転させられたためだった。

(2) 郊外教会コミュニティの多様性

人種を問わず布教するキリスト教会では異文化が邂逅し、文化が融合する。19 世紀半ばに設立された St Joseph Church は後背地に位置する最も古い教会のひとつ。都心の教会は言語毎に教会を設立したが、ここは西部地域唯一のカトリック教会として多文化の信徒を集めた。



古典主義様式の旧聖堂に替わって建設された主聖堂 (1963)。屋根や装飾が中国的。



主聖堂の翼廊の絵画。キリスト教のモチーフが中国絵画の手法で描かれている。

(3) メルティング・ポット・モスク

シンガポールのムスリムといえば土着のマレー人のイメージがあるが、実は南インドにルーツを持つタミル人、アラブ人など様々な民族がいる。彼らはそれぞれ母国の様式を真似てモスクを作ったが、一方で異なる様式に影響を受けた折衷様式も誕生していた。



Khadijah Mosque(1920)。躯体は南インド様式、後日増築された屋根はマレー様式。



Kampong Siglap Mosque(～20c 初頭)。マレー様式が色濃いが平面形状等に他文化の影響がある。

独立期の宗教空間（1950 年代後半～現在）（写真は全て筆者撮影）

(4) 郊外住宅地計画における宗教施設配置計画標準（図は上が北。）

20 世紀前半から問題化していた都心部の過密は、1960 年にシンガポール自治政府が設立した住宅開発庁による郊外住宅地建設と人口移転によって根本的改善を見た。それら郊外住宅地では生活必要施設として宗教施設も計画された。1970 年代後半になると多文化社会に対応した計画標準が策定され、中国寺院、モスク、ヒンドゥー寺院、教会がそれぞれ必要とする用地面積や対応する住戸数の目安が示された。下に示した Tampines(1979 年建設開始) の住居エリアでは、赤色で示した宗教施設用地が満遍なく配置され、多くが病院や教育施設に隣接して配置されていることから、宗教空間が標準化され工学的操作・管理の対象になったことが分かる。



- 宗教施設
- 住宅
- 地上階が商業施設の住宅
- 商業施設
- 教育施設
- 病院・コミュニティ施設
- 企業・工業施設
- 公園・スポーツ/娯楽施設・オープンスペース
- 大量高速交通機関(電車)駅

(5) 習慣化した共生

道教、仏教、ヒンドゥー教は宗教的ルーツが似ているためか共生しやすいと考えられ、信者が異教の神に祈ったり、同施設内に複数の宗教の神像が祀られたりする様子が見られる。寺院の近接やかつての村生活での異教同士の相互交流がこうした習慣の背景にあることが分かった。



1880 年代から 2 軒隣に仏教寺院を持つヒンドゥー寺院。軒先には仏教式参拝用の香炉が置かれる。



ヒンドゥー教の神像を併置する道教寺院。幼少期に道教寺院を参拝していたインド人が設置した。

(6) テナント化する宗教空間

狭い国土の有効利用のために土地利用が細かく決められているシンガポール。宗教活動は原則専用地で行わなければならないが、用地は数が限られ高額なため小規模団体は取得できない。彼らは自宅やテナントビルを装飾で宗教的空間に変えつつ、隣接する世俗的活動と共生する。



霊媒の自宅である公共団地 (通称 HDB) の住戸で活動する道教寺院。共有廊下に信者が並ぶ。



工業地帯のテナントビルに入居する道教寺院。毎週日曜に太鼓を打ち鳴らして儀式を行う。

何を感じ、何を得て、今後はどう活かしたいか

独立後のシンガポールは、国民を人種カテゴリに分けてそれらに個々人のアイデンティティを帰着させ、カテゴリ間で公平性を保つことにより社会秩序を作ってきた。そのため植民地社会も人種ごとに語られることが多く、多文化主義は独立後の政策の結果と捉える傾向があった。しかし今回の調査によって、植民地期シンガポールでは異なる宗教・人種の空間が近接して立地しており、カテゴリを超えた影響関係も建築や絵画に折衷的意匠が現れるほどに存在したことが分かった。また、そうした異なる文化の共存は当たり前のもので人々の生活に根差しているように感じられ、それが宗教空間の標準化・管理対象化が進んだ独立期の社会において、小規模活動を含む多様な宗教のあり方を可能にする一つの背景になっているように思われた。これまでの成果でシンガポールの各時代における宗教空間を成立させている社会的背景が大まかに理解できたため、今後は都市建築的条件を明らかにし、日本を含む他の都市空間に応用できる知見を得ることを目指す。